

「イラクから見る日本～暴力の連鎖の中で考える日本の平和憲法」



顔の見える「人道支援先進国」に

JR 本郷台駅のすぐそばに「地球市民ぶらざ」という大きなイベントホールがあります。ここに、栄区九条の会はエイドワーカー（国際救助員）である高遠菜穂子さんをお招きしました。「イラクの現実」を背景に、日本人が考え、行動しなければならない大事なテーマについて、様々なデータや映像の資料を示しながら、息の詰まるような恐ろしい事態を話して下さいました。

私たちは 2001 年のアメリカでの 9.11 多発テロ事件の衝撃の映像を忘れることが出来ません。アメリカはこのテロを計画実行したアルカイダを標的とし、また、イラクがそれを支援し、大量破壊兵器を隠匿していると考えて、2003 年、「戦争」と決めつけ、イラクに先制攻撃を加え、有志連合軍を伴い、イラクの街、人々をズタズタ、ボロボロ、グチャグチャに破壊し、殺した恐ろしい事実を目を背けることはできません。ところがイラクとアルカイダ、イラクと大量破壊兵器とは無関係であることが検証され、アメリカのブッシュ元大統領、イギリスのブレア元首相もこれを認め、停戦となりました。イラク国内の治安が乱れ、実質的に 2011 年まで、アメリカ軍が駐留し、占領し続けました。日本も、当時の小泉元首相が後方支援を申し出て、自衛隊を派遣しました。事実誤認だったと世界が認めても、日本はイラクが大量破壊兵器を持っていたという認識を変えず、イラク戦争の検証を明らかにしていないのです。事実、真実を隠ぺいする体質です。

米軍・多国籍軍の死者数 5 千弱に対し、イラクで兵士だけでなく、50 万を超す民間人も殺され（*PLOS Medicine*による）ました。テロ掃討とは言え、戦闘は民間人を巻き添えにした虐殺、無差別な爆撃でしたから、イラク人のアメリカへの反感は根深いものがあります。高まるばかりです。さらにテロ組織アルカイダも反米では一致しています。国内の宗派対立の殺し合いも激しくなっています。いずれも民間人が殺されていくのです。この憎悪が IS の台頭を許しました。暴力の連鎖です。

このただなかに、インド、カンボジアでボランティア活動をしていた高遠氏が 2003 年からイラクに入り、子どもや女性への食糧支援などに関わるようになり、現地で身を挺して、働き始めました。一度捕虜になったとき、日本では、首相を始めとして、「自己責任」だとし、切り捨てるような、冷たい対応を受けました。けれども高遠氏は一貫して援助活動をしてこられました。

イラクの人々は日本を「平和憲法」を保持し、繁栄する国だと高く評価していました。ところが「難民救済」がテロ掃討作戦への援助（安倍首相の邦人拘束を受けての演説）であったり、自衛隊の「復興支援」が火器携帯の警護（南スーダン）であったり、「積極的平和主義」とは自衛隊海外派遣、武器輸出であったりして、日本の平和は誤解であり、過去のものと評価が変わってしまったのです。

私たちは日本が平和の国だと信じ、また、世界の人々からも期待されていたはずで、本気で「平和」を構築するためには、顔の見える「人道支援先進国」を目指しましょう。ニュースをよく見て、世界の現実を目を向けましょう。日本がどんな支援をしているかを確認しましょう。国際協力の現場に、できるだけ人々を送れるようにしましょう、と具体的に示されました。